



【「分析化学の発展がもたらした文化財の新しい世界-色といろいろ-」の開催】

2023年3月4日に東京文化財研究所(以下、東文研と表記)早川泰弘副所長・奈良文化財研究所高妻洋成副所長の退任記念シンポジウムが東文研保存科学研究センター・奈文研埋蔵文化財センターの主催、ならびに日鉄テクノロジー株式会社との共催で開催されました。東文研をメイン会場として、奈文研のサテライト会場とYouTubeによる同時配信もおこない、あわせて約290名の方々にご参加いただきました。シンポジウムは分析化学の発展がもたらした文化財の新しい世界を、その「色」という切り口から紐解く趣旨で企画され、両副所長による基調講演にくわえて、文化財研究の最前線で活躍する7名の研究者の方々にご講演をいただきました。

早川副所長には「日本絵画における白色顔料の変遷」というタイトルでご講演いただきました。この講演はこれまでに取り組まれた膨大な調査成果にもとづくもので、古代から普遍的に使われてきた白色顔料についての総論的な内容でした。白色顔料が鉛白から胡粉に変遷することや、さらに時代が下ると再び鉛白も併用されるようになり、そこには技法と



会場の様子

の相性や地域性がみられることが科学分析にもとづき示されていました。文化財の新たな歴史が科学分析によって紐解かれるることを示す象徴的な講演でした。

また、高妻副所長の講演は「領域を越えて」というタイトルでした。講演は考古資料・遺跡の保存科学、高松塚古墳の石室解体とその後の壁画の調査、文化財防災の取り組み等、非常に多岐にわたるものでした。講演の終わりには自然科学、人文科学にくわえて新たに社会科学の知見を導入する文化財科学の新たな展望についても触れられました。

その他の講演も文化財の発色メカニズム、色の数値化による文化財の劣化の有無に関するモニタリング等、色という切り口で大変幅広い内容でご講演いただきました。また、講演後には講演者によるパネルディスカッションもおこなわれました。

東文研・奈文研・日鉄テクノロジー株式会社からなるスタッフの連携によりシンポジウムは盛会となりました。両副所長が育まれた三者の緊密な関係性により、組織を超えた連携が後進の私たちの代において一層進んでいることを感じ、改めて両副所長が残された功績が胸に刻まれた一日でした。なお、シンポジウムの模様は東文研のYouTubeチャンネルに公開される予定です。ぜひご覧ください。

(埋蔵文化財センター 柳田 明進)



パネルディスカッションの様子



発掘調査の概要

石神遺跡調査(飛鳥藤原第212次)

前号でもご紹介したとおり、都城発掘調査部(飛鳥・藤原地区)では、2022年12月から2023年3月にかけて石神遺跡東方の発掘調査をおこないました。石神遺跡は飛鳥寺の北西に位置し、須弥山石・石人像が発見されたこと等から、「日本書紀」にみられる齐明朝廷の饗宴施設としての性格が注目されてきた遺跡です。

奈良文化財研究所は、1981年度から2008年度までの21次にわたる発掘調査を通じ、石神遺跡の中核施設群とその変遷をあきらかにしてきました。

そのさらに東にも重要施設が展開していた可能性があることから、2022年より遺跡の東方での発掘調査に着手しています。

昨年の第209次調査では、石神遺跡第1・3次調査で検出した東西掘立柱塀と東西溝が、さらに東へ50m延びることを確認しました。飛鳥淨御原宮期の遺構が、従来考えられていたよりもさらに東へ広がることがあきらかとなったのです。これをふまえ、今回の調査では、昨年の調査区から30mほど東に南北24m、東西14mの調査区(336m²)を設定しました。



調査区全景(南東から)

昨年の調査で検出した東西掘立柱塀と東西溝がどこまで延びるか探りつつ、その北側の様相を追究することがねらいです。

調査の結果、昨年の調査で確認した東西掘立柱塀はその延長上に検出されず、今回の調査区までは延びていないことがあきらかとなりました。ただし、東西溝は調査区のすぐ南側に存在している可能性が高く、調査区南壁で確認された粗砂層が、東西溝上層の堆積物にあたるものとみられます。

このような成果のいっぽうで、調査区中央付近では2条の南北溝を検出しました。西側の南北溝1は幅1.7~2.0m、深さ0.5m前後で、北で西に約5度振れています。東側の南北溝2は幅0.7~1.1mの溝が掘られたのちに複数回の掘り直しがおこなわれ、溝幅が1.5~2.0mに広がっています。出土土器からみると、南北溝1のほうが古い時期に埋没しているようです。どちらの南北溝も調査区の北外へと延びていますが、調査区南外に存在するとみられる東西溝との関係が課題となります。

さらに、南北溝1に壊されるかたちで石組遺構を検出しました。東西2.5m×南北4mの長方形の東辺に、東西1m×南北2mの張り出し部をもつ平面形態に復元されます。石組の底面には疊が敷かれていましたが、今回は部分的な断面調査にとどめたため、詳細な構造やその性格は今後の課題です。

以上の成果から、第1・3次調査区から東に延びる東西掘立柱塀による飛鳥淨御原宮期の区画は、今回の調査区よりも西側におさまる可能性が高くなりました。今後の調査にもぜひご注目ください。

(都城発掘調査部 谷澤 亜里)



南北溝1に壊される石組遺構(西から)

西大寺弥勒金堂の発掘調査(平城第655次)

都城発掘調査部(平城地区)では、個人住宅の建て替えにともない、西大寺弥勒金堂の発掘調査をおこないました。調査期間は2023年3月1日から4月4日、調査面積は約47m²です。

西大寺は、天平宝字8年(764)に孝謙太上天皇(のちの称徳天皇)の發願によって建立された大寺院です。現在の西大寺の境内は鎌倉時代に復興された姿を色濃く残していますが、創建期の西大寺はより広大な敷地をもっていました。その遺構は今も市街地の地下に埋もれていますが、発掘調査によって徐々にあきらかになります。

創建期の西大寺の中軸(金堂院)には、薬師金堂と弥勒金堂という二つの金堂が南北に並び、それらが回廊で囲われていました。これまでの発掘調査で、薬師金堂(平城第408・422次調査)や金堂院回廊(平城第505・521次調査)の遺構が確認されており、発掘調査成果や文献の記述をもとにした金堂院の伽藍復元案が『紀要2014』で提示されています。この復元案によると、今回の調査地は弥勒金堂の東北隅部分にあたると考えられますが、弥勒金堂そのものの発掘調査は今回が初めてでした。

発掘調査の結果、調査区全体に建物の基壇が広がり、復元案にかなり近い形で弥勒金堂に関連す



調査区全景(北から)

る遺構を検出することができました。基壇の上面には、直径約3mの穴が6基掘られており、規則的な配置や出土遺物から、近世以降に礎石を抜き取った穴であることがわかりました。

さらに断削調査を進めたところ、礎石抜取穴の真下で、基壇構築の前段階に掘られた穴を6基検出しました。こちらは一辺約3m、深さは最大1.4m以上もある大規模なもので、大ぶりの石や瓦を用いながら埋められた状況を確認できました。以上の特徴から、これらの穴は、礎石を据える箇所の地盤改良を目的とした壺地業であると考えられます。

壺地業は、西大寺では薬師金堂や金堂院回廊でもみられる工法ですが、これらは基壇を築いた後に、礎石の据え付けと一緒に地業をおこなっています。いっぽう、弥勒金堂の場合は、地業の規模が大きいことにくわえ、地業をおこなってから基壇を構築する点で異なります。この工程の違いは、造営前の地盤の状況や建物構造の違いなどを反映していると考えられます。

今回の調査では、限られた調査面積でしたが、弥勒金堂の遺構が良好な状態で地下に残っていることがわかりました。そして、壺地業の施工後に基壇を構築するという特徴的な工法を採用したことでもあきらかとなりました。また、壺地業の配置がわかったことで、弥勒金堂の柱位置を改めて検討する事が可能になりました。今回の調査によって、二つの金堂の存在が考古学的にあきらかとなったのは大きな成果です。往時の西大寺金堂院のすがたをよみがえらせるために、調査研究を継続していきますので、今後の進展にどうぞご期待ください。

(都城発掘調査部 田中 龍一)



礎石抜取穴と壺地業(北東から)

【宮都組】 キュートぐみ

かわらびとちゃん

手に持つ籠と耳は平城宮跡内で出土した軒丸瓦と軒平瓦。平城宮が造られ始めた時に建築された、第一次大極殿院の瓦がモチーフです。

**ツゲじい**

内裏跡などでは、柱の形に切り込んだイヌヅグ(大黄楊)の木を補えて、掘立柱建物の跡を表現しています。イヌヅグは根が地中で浅く広がることから、遺跡を傷付けません。



キャラクター設定の背景となった平城宮跡の調査・整備について

「キュートぐみ【宮都組】」は平城宮跡の史跡指定100周年を記念して誕生したキャラクター達です。平城宮跡や奈良時代、考古学にまつわるテーマについて、親しみと関心をもってもらうために展覧会やSNSなどで活躍しています。愛くるしい見た目をしていますが、その設定は専門分野の考证によって裏付けられています。ここでは、キャラクターのものになった平城宮跡の出土品とともに紹介しましょう。

キュートぐみはこれからも平城宮跡を盛り上げるために、イベント出演やグッズ展開をしていく予定です。新しいキャラクターも登場していく予定です、今後の活躍をご期待ください。(企画調整部 小原 俊行)

にやら三彩

中国の唐三彩という陶器を模して、日本で作られたものが奈良三彩。

奈良三彩では3色の釉薬が塗り分けられていますが、唐三彩とは色味が異なるため、日本の職人が独自にアレンジしたのでしょうか。

**ドーバちゃん**

モチーフは馬のかたちをした土馬。8世紀の土馬には鞍がなく、尾がはね上がっているのが特徴です。片足の色が異なるのは、土馬の多くが欠損した状態で出土することに由来します。これは、おまじないのために意図的に壊されたためと考えられています。

**えんめん犬**

円面硯は須恵器で作られた円形の硯です。中国の漢代から使われ続いているもので、様々な形状があります。墨は平城京の宅地跡から子供の成長を願って埋められた壺から出土しています。これらは中央官庁である平城宮に勤める役人には欠かせない文房具でした。

**ひとがたさん**

人形と呼ばれる木製品がモデル。人形はおまじないに使われ、大祓の際、水に流したとされています。壬生門前の溝からもまとめて出土しました。



研究を止めるな！

奈良文化財研究所では、研究成果の共有・検討の場として多種多様な研究会を開催し、全国から多くの方にご参加いただきました。しかし、新型コロナウイルス感染症のまん延によって様々な活動が制限されていく中、こうした研究会活動も大きく影響をうけたこととなりました。今回は、そうしたコロナ禍において、いかに研究活動を続けてきたか、ご紹介します。

古代官衙・集落研究集会　古代官衙・集落研究集会（官衙研）は、全国の官衙や集落に関心のある考古学・文献史学・建築史学・歴史地理学など多様な研究者が集まる研究集会です。1996年から毎年研究集会を開催してきました。2020年には官衙研の原点ともいえる「古代集落の構造と変遷」をテーマとする連続企画を立ち上げ、研究会を盛り上げていこうとしていたその矢先、緊急事態宣言が発令されました。研究会の開催可否についても議論を重ね、2020年12月には報告者と事務局のみの完全オンライン配信研究会を実施しました。研究会は無事終了し、「多くの研究会が中止・延期になる中、Web上ででしたが一堂に会する直さは十分得られた」といった、温かい感想も頂戴することができました。当日の討論では、参加者からメールでの質問を受け付け、さらながら「おたより紹介のコーナー」の様相を呈していたのも、今では懐かしく思い出します。

2021年からは、現地参加とオンライン配信を併用した研究会を実施しています。遠方にお住まいの方、子育て中の方、日々の業務と重なった方など、以前は研究会への参加が難しかった方が、オンラインでご参加いただけたのもありがたいことでした。



第24回古代官衙・集落研究集会の様子

古代瓦研究会　2023年2月4・5日には、第22回古代瓦研究会シンポジウムを開催しました。本研究会は地方公共団体の文化財専門職員や大学・博物館等の研究者を主な対象に、古代の瓦に関する多分にマニアック（？）で奥深い研究発表と討論を繰り広げてきました。その最大の特徴は各回テーマに沿った実物の出土瓦を会場に持ち寄り、参加者がそれを手に取りながら喧々諤々の議論を交わすところにあります。

そうした「売り」ゆえに、この数年は研究会のあり方が問われる厳しい状況にありました。新型コロナウイルス感染症拡大の兆しがみえ始めた2020年2月の第20回研究会の開催後、2021年は中止、2022年の第21回研究会はオンライン配信のみでの開催となり、本研究会の「売り」を押し出せない状況となっていました。本年は感染拡大防止のための十分な対策をおこなった研究所での開催とオンライン配信の併用により、実物資料を会場に持ち寄る方式をようやく再開することができました。

研究会のオンライン配信の有効性はこの数年で大きく認識されました。いっぽうで多くの方が実物資料を手に取り議論する場の提供は本研究会の大きな使命であり、こうした方法は古代瓦の研究推進にとっても極めて重要です。古代瓦の実物に触れ、それを作り、運び、葺き、見上げた人々と同じ体感を得て議論する。こうした感覚の共有はオンラインではまだまだ難しいものです。こうした実感をどうすればオンラインで伝えることができ議論を深められるのか。新たなハイブリッド方式による古代瓦研究会の実施を通じて、今後はこうしたことも検討していきたいと考えています。

（都城発掘調査部 川畑 純・道上 祥武）



第22回古代瓦研究会の様子

カンボジア・西トップ遺跡の調査

カンボジア・西トップ遺跡の修復事業は、コロナ禍の間も現地スタッフと連絡を取り合いながら進めています。現在は中央祠堂の屋蓋部の再構築を進めています。また、再構築にともなう調査研究も進めており、2023年2月、3年ぶりに日本から現地へ行き、発掘調査と建造物調査をおこないました。

2019年度までの調査で、西トップ遺跡の中心建物である中央祠堂・南祠堂・北祠堂の解体調査が完了し、祠堂部分の変遷がほぼあきらかになっています。残るは中央祠堂前面の東テラスのみです。

東テラスは石材の大きさや形状の違いなどから、中央祠堂に遅れて増築された部分であると考えられています。これまでの調査で、東テラスの下層には砂岩の石敷遺構とラテライト石列が検出されており、東テラスの前身遺構の存在が想定されていました。今回は、2019年度に確認したラテライト石列がどこまで続くのかを確認するため、東テラス北側面の外装石を外し発掘調査をおこないました。前回確認したラテライト石列は東テラスを構築する前に造られたものとの想定をしていましたが、今回の調査ではこの石列が現在の東テラスに沿って敷かれていることがわかりました。この石列が現在の東テラスと同時に造られたとすると、これまでの見解と年代的に矛盾が生じます。したがって、①東テラスの構築時に既存のラテライト石列を延長しているか、②現在の東テラス構築以前に、同規模のテラス状の遺構があつたものを造り変えたのではないかと考えています。

今後はさらに東側の東テラス前面部分を調査し、東テラス構築の過程をあきらかにしたいと思います。

(文化遺産部 大林 調)



西トップ遺跡の調査の様子（北東から）

育成林業に関する文化的景観研究会の開催

奈良文化財研究所景観研究室では、「京都中川の北山林業景観」(京都府京都市)の価値をあきらかにする調査や、重要文化的景観「智頭の林業景観」(鳥取県智頭町)の整備計画策定に向けた価値の再検討のための調査を、各市町からの依頼のもと実施してきました。その中で感じたのは、山林のみの価値ではなく、それを担ってきた集落も含めた価値付けが必要であるということ、それは絶対的価値でははかれないもので、典型性や独自性を求めるには比較研究が欠かせないということでした。また、文化的景観では、農業を主産業としてきた地域は「農業景観」ではなくて「農村景観」と呼ぶのに對して、林業に關わる地域では「林業景観」と呼びます。それは、前者がムラ(民居の一集団)とノラ(耕作する田畠)とヤマ(利用する山林原野)を一体としてとらえてきたのに対し、後者はヤマだけをとらえがちだったことも理由にあると考えられます。

そこで、スギの育成林業を主産業としてきた地域を対象に、文化的景観という觀点からどのようなことが見出されるのか、その保全はどのようにできるのかについて議論する場として、2023年3月9日に文化的景観研究会を開催しました。研究会では、「遺産として見出される林業景観」(奥敬一／富山大学)、「近代日本のスギ主産地と文化的景観」(恵谷浩子／奈文研)、「景観変遷にみる北山・智頭・鈴鹿林業地城の特性」(竹内祥一朗／奈文研)、「山の風景の多様性－計画制度から保全活用を考える」(小浦久子／神戸芸術工科大学)という4つの報告の後、ディスカッションを実施しました。

議論の中で、針葉樹の育成林業は近世に生まれたものの、それは局所的なものであったこと、近代になり新政府による統括的な林政がスタートして、用途が途絶えた草山や柴山が拡大造林の対象となり、さらに戦後には薪炭林や奥地の天然林の針葉樹人工林化が進められたこと、などが話題にあがりました。針葉樹の育成林業は一部の伝統的林業地帯を除いて非常に新しい営みであり、持続的なものとなっているわけではなく、文化財の価値として捉えるには引き続き検討を進めていく必要があると考えています。

(文化遺産部 恵谷 浩子)

飛鳥資料館 第14回写真コンテスト「飛鳥のくらし」

飛鳥を歩くと、四季折々のくらしの風景に出会うことができます。田植えの頃は青空を反射した早苗田がすがすがしく、晚秋には棚田に立ちのぼる野焼きの煙が郷愁を誘います。こうした風景は、ときに地下の遺跡や万葉の時代への想像をかき立てます。飛鳥の情景は、豊かな自然、悠久の歴史、そして人々のくらしが三位一体となって育まれてきたのです。

第14回写真コンテストでは、「飛鳥のくらし」をテーマとします。農作業の風景はもちろん、日常の何気ない光景など、多様な飛鳥のくらしを写し取った作品を広く募集・展示します。人々の息吹がいきいきと感じられるような作品の撮影と鑑賞を通して、飛鳥のくらしの魅力にふれてみてはいかがでしょうか。(飛鳥資料館 竹内 祥一郎)

応募締切：2023年6月30日(金)必着／展示期間：2023年7月14日(金)～9月18日(月)

来館者投票期間：2023年7月14日(金)～8月20日(日)

開館時間：9：00～16：30(入館は16：00まで)

休館日：月曜日(8月14日は開館、7月17日・9月18日は開館し翌日休館)※8月15日(火)は無料入館日

ホームページ：<https://www.nabunken.go.jp/asuka/> お問合せ：☎ 0744-54-3561



平城宮跡資料館 夏期企画展

「イカリの翼 - 薬師寺の発掘成果から見る近世と近代 -」

奈良文化財研究所では奈良の諸寺院の発掘調査・研究を継続しています。特に、薬師寺では、戦後、伽藍復興のための発掘調査を、近年では東塔の解体修理とともに発掘調査にも携わってきました。考古学は人々の営みを出土品や遺構から研究する学問ですが、決して古い時代に限るわけではありません。この展示では、古代のイメージが強い薬師寺ですが、敢えて調査成果の中から近世や近代の出土遺物とその調査成果をご紹介します。

第1部では薬師寺の発掘調査の成果のうち、様々な近世や近代の出土資料を紹介します。第2部では、薬師寺から出土した近代の陶製プレート片からグラダイヤーや赤崩焼など、今や忘れられつつある昭和初期の社会をうかがいます。

今春、薬師寺では解体修理を完了した東塔の落慶法要がおこなわれました。古代から法灯を保つ薬師寺ならではの氷い歴史の流れと、戦争の影が忍び寄るなか、多くの人々が「翼」に憧れ、空を見上げた昭和初期の世相に思いを馳せ、歴史を探る旅の醍醐味をお楽しみください。

(企画調整部 岩戸 晶子)

会 期：2023年7月22日(土)～10月1日(日)

開館時間：9：00～16：30(入館は16：00まで)／休館日：月曜日(休日の場合は翌平日)

ホームページ：<https://www.nabunken.go.jp/heijo/museum/> お問合せ：☎ 0742-30-6753(連携推進課)



2023年7月22日～10月1日 平城宮跡資料館



■ お知らせ

平城宮跡資料館 春期ミニ展示

5月27日(土)～7月17日(月)

「よみがえる西大寺金堂院」

■ 記録

文化財担当者研修(特別研修)

○文化財多言語化課程

3月10日(金)

70名

文化財担当者研修(専門研修)

○古文書歴史資料調査基礎課程

6月5日(月)～6月9日(金)

20名

飛鳥資料館 ミニ展示

「長法寺十三重石塔に納められた押出三尊仏像と御正体」

4月21日(金)～5月21日(日) 3,288名

第128回公開講演会

「よみがえる西大寺金堂院」

6月10日(土) 218名

編集 「奈文研ニュース」編集委員会

発行 奈良文化財研究所 <https://www.nabunken.go.jp>

Eメール koho_nabunken@nich.go.jp

発行年月 2023年6月